

**短編小説書きました。**  
note で公開中です。ぜひご覧ください。今後も短編小説を書いています。



<https://note.mu/koniphoto>

**短編小説書きました**  
**タイトル「応援バント」**



## 「応援バント」

僕の名前はゆうや。野球が大好きだ。野球チームに入ってみんなと練習している。みんな僕よりもうまい。僕ができないことをみんなはできてしまう。なかでも、かいと君は飛びぬけてうまい。ホームランを何本も打っている。みんなうまいから、僕は試合に出られない。試合で僕は、みんなを応援している。大きな声を出して応援。

僕はみんながやりたがらないバントの練習をしている。バントなら僕だ。監督にそう思って欲しかった。小学校、最後の試合。僕は試合に出られることになった。すごく上手なかいと君が、練習で捻挫した。嬉しくてお父さんとお母さんに言ったら、お父さんが仕事を休んで応援に来てくれることになった。大好きなお父さんとお母さんが来てくれる。僕は試合がとても楽しみだった。

試合の日はとても天気良かった。

お父さんとお母さんに、カッコいいところを見せたい。2回打席に立ったけれど、どれも三振だった。試合は1点差で負けていた。最終回。点を取らなければ負ける。ランナーが3塁にいた。ワンアウト。僕の打席がまわってきた。僕はバントをしてランナーを帰そうと思った。

僕は緊張しながらバットを持ち、打席に向った。その時、監督が大きな声で言った。

「バッター交代！」

僕の代わりに捻挫しているかいと君が出た。かいと君は思い切りバットを振った。ホームラン！転勝ちだ。みんなが笑顔でかいと君を出迎えた。でも、僕は笑顔になれなかった。今まで一生懸命練習してきたバント。最後まで試合で使うことはなかった。なんで、僕じゃダメなの。心の中で何度もつぶやいた。

「ゆうや。試合、良かったぞ」お父さんが帰り道に言った。

「僕、何もできなかった」うつむきながら小さな声で返事をした。

「ゆうやがベンチで誰よりも大きな声でみんなを応援していただろう。お父さん、嬉しかったよ」

「そんなの、誰だってできるよ」

「誰でもできることを、きちんとする。それは、誰でもできることじゃないんだよ」

僕はお父さんの顔を見た。

「かいと君も最後の試合だったんだらう。監督もかいと君に最後の試合に出て欲しかったんだよ」

「僕、バントの練習をいっぱいしてきたんだよ。僕がランナーを帰したかった」

「よし。帰ったらお父さんと野球をやろう。」

お父さんもお母さんも笑ってくれた。僕も笑った。僕は野球が大好きだ。お父さんとお母さんも大好きだ。今日、お父さんとお母さんに試合を見てもらえて良かった。

